

Title	編集者アルベルト・レンプの死を悼む手紙：ミュンヘンの神学的アヴァンギャルドとしてのゲオルク・メルツとクリスティアン・カイザー社
Author(s)	深井，智朗
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.52, 2012.2：209-239
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4229
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

編集者アルベルト・レンプの死を悼む手紙

——ミュンヒエンの神学的アヴァンギャルドとしての

ゲオルク・メルツとクリスティアン・カイザー社

深井 智朗

はじめに

ここに関係者の許可を得てはじめて紹介するのは、かつてミュンヒエンに本社であったクリスティアン・カイザー社の社主であり、編集者であったアルベルト・レンプ（一八八四～一九四三年）の死に際して、同社の社員に宛てて同社主任編集顧問でもあったミュンヒエンの神学者ゲオルク・メルツが書いた追悼文の翻訳である。さらに手紙が書かれた思想的、社会史的な背景事情を説明するための解説を付した。⁽¹⁾ 解説では、亡くなったレンプ、そしてその出版社、さらにはこの追悼文を書いたゲオルク・メルツをめぐる精神的考察、またこの手紙の中で隠された仕方で言及されているこの時代の神学思想的な出来事の説明も試みた。

この手紙はレンプの所属していたミュンヒエン市シュヴァーピングにあるクロイツ・キルへの資料室に保存されていた。この教会は地下鉄ホーエンツォーレン広場のそばにあり、近所のイザベラ通り二〇番地にはレンプがかつて住

んでいた家が残っている。五階建ての建物の上にはミュンヘン市のシンボルでもある修道士とクリスティアン・カイザー社のロゴ・マークのついた鉄塔がついていた。最上階には彼の孫が今でも住んでいた。彼ゆかりの教会には、彼の生誕一二五周年を記念し、またナチス時代の教会の戦いを忘れないために「アルベルト・レンプ広間」と名付けられた多目的ホールがあり、現在この教会の牧師をつとめているヘルマン・ガイヤー博士が資料整理をはじめ、管理責任の全てを負っている。⁽²⁾レンプ家で保存されていた資料は既に教会に全て移されているが、今日に至るまで未整理のままである。ここに紹介する資料は二〇〇九年一月一七日にレンプ家で発見され、資料ボックスに入れられたままになっていたものである。

この手紙についてはオットー・ザロモンが「ミュンヘンの牧師ゲオルク・メルツがレンプの人柄を偲ばせる、しかし時代状況を意識した抑制の利いた慰めの言葉を同僚たちに書き送った」と書いているが、⁽³⁾その所在はこれまで不明のままであった。

公開にあたってはガイヤー博士を通して、レンプ家の関係者の方々、またゲオルク・メルツの関係者と連絡をとり、「手紙は個人宛ではなく、公に読まれることを前提にしている」のであるから公開することに問題はないとの許可を得た。

I 資料——ゲオルク・メルツから

クリスティアン・カイザー社の社員宛の手紙

「アルベルト・レンプの福音主義出版社の社員のみなさんへ

ペンテコステの祝日に私たちはミュンヘンの墓地 (Waldriedhof)^(訳注1) でアルベルト・レンプの埋葬を執り行いました。一九四三年の五月まで彼は元気でしたし、出版の仕事に情熱を傾けておりました。脳梗塞が最初に彼を襲い、そして四週間後に大変な苦しみの中、彼は最後の時を迎えたのでした。一九四三年六月九日に彼は召されました。五九歳でした。

アルベルト・レンプはシュヴァーベンの神学者の子であり、孫であり、また彼の兄弟も神学者でした。ルードヴィッヒスブルクとライプツィヒで学業を終えた後、一九一二年にミュンヘンのクリスティアン・カイザー書店の責任を引き受けるようになりました。最初の数年、この書店は見た目には気高く、順調のように見えたのですが、古くて、威厳に満ちたこの書店の経営状態は決してよいものではなく、むしろ危機的な状態でした。しかしその後レンプは、ドイツの出版業界の中でも指導的な販売業者として認められるようになったのです。それは彼が、危機的な状況にひるむことなく、課題と取り組み、学ぶこと、改革すること、またさまざまな問題を処理することに、まさにたゆまぬ努力を重ねたからでした。彼のあまりにも遠慮深い性格が、クリスティアン・カイザー出版社と、以前から付き合いのあったフェリックス・ダーンやリヒャルト・ヴァーグナーといった人々、とりわけ文学者であり、法律家であった「ゲルハルト・マウラーのような研究者たちとの契約を更新し続けることを妨げることになりました。しかし「フリードリヒ・リッテルマイヤーや「クリスティアン・」ガイヤーが、この出版社に彼らの説教集を出版することを委託した時には、一度引き受けた仕事に対して、それが成功するまで、彼は問題処理能力と集中した断固とした課題との取り組みを示し続けたのでした。

彼の出版社にとって決定的な出来事が、一九二〇年、そして一九二二年に起こったのでした。レンプの出版社から著書を刊行した神学者たちは当時多くの読者を獲得し、一般的に見て成功したその時代の神学者たちも彼ら自身の著作の出版を申し出ていたにもかかわらず、彼は若いまったく名前を知られていなかった著者たちの仕事へとその関心を変え

てしまい、その時代、忘れ去られ、ほとんど注意が払われていなかった神学的な著作の新版を刊行することにしたのです。なぜなら、彼はミュンヘンの教会のメンバーとして、ある神学運動、何とひとりの若い説教者(訳注4)のもとに生まれたこの運動に注目するようになっていたからです。その名は神学の刷新、そして教会の刷新と結び付いていました。レンプは「その若い無名の神学者の書いた」一連のエポックメイキングな著作の編集者となったのです。そしてとりわけ宗教改革者たちの業績を理解するための著作の刊行に、同時にキリスト教会の奉仕に責任を持ち得るような神学研究の刊行に尽力するようになったのです。レンプは、さまざまな外部からの問いに対して、単に彼の出版社の著者たちにとつての都合のよい、巧みな擁護者であつただけではなく、むしろ彼は多くの場合それらの人々の友人であろうとしたのです。そのことによつて、彼は彼の出版社から刊行される著作とその関係者たちとの交わりを、彼の教会的な奉仕の一部と考えるようになったのです。彼の教会の牧師が選び、墓石に刻まれた言葉には、彼が教会の理解者として誠実に注意深く奉仕したことへの感謝が込められているのです。私自身も、この類まれな友人へ思い出を、使徒がピレモンに宛てた愛の言葉と共に思い起こすものです。「わたしは、祈りの時にあなたをおぼえて、いつもわたしの神に感謝している。それは、主イエスに対し、またすべての聖徒に対するあなたの愛と信仰とについて聞いているからである」(訳注5)。私はあなたがたが私たちとこの悲しみを共にして下さっていることを理解しています。私はまた同時に、マリア・レンプ夫人、また戦場にある彼の息子、そして彼の娘の名においてあなた方に心からの哀悼の想いを伝えたいと思います。

ゲオルク・メルツ〔署名〕

(訳注1) この墓地はミュンヘンの Fürstener Straße 288 にある。Lorettoplatz 3 にあるのは一九六〇年代に作られた新しい墓地である。この墓地については Hans Grässel, Der Waldfriedhof in München, München 1907 を参照のこと。

(訳注2) フリードリヒ・リッテルマイヤー (Friedrich Rittelmeyer 1972: 10, 5–1938: 3, 23) は神智学者であり牧師であった。ルドルフ・シュタイナーの影響を受け「キリスト者共同体」(Christengemeinde) を創設した。彼はベルリンの牧師時代はいわゆるリベラリズムの影響を受け、教会の伝統的な教義に対する批判的な態度を表明していた。「キリスト者共同体」は伝統的な制度から解放された純粋なキリスト教を志向しており、彼は一貫していわゆる「教会外のキリスト教」の立場にあつた。

(訳注3) クリスティアン・ガイヤー (Christian Geyer, 1862, 10–1929) はネルトリンゲンで牧師をした後、バイロイトの神学校の校長となつた。その後リッテルマイヤーと出会い、神学の立場からの政治や文化、世界政策についての評論を書き始め、一九一〇年に月刊雑誌『キリスト教と現代』(Christentum und Gegenwart) を創刊した。この雑誌はクリスティアン・カイザー社が刊行を援助し、また彼もシュタイナーの影響のもとに、「キリスト者共同体」の指導にあたつた。

(訳注4) これはカール・バルト (Karl Barth, 1886–1968) と、彼の『ローマ書注解』のドイツにおける流通と再版のことをさしている。

(訳注5) これはピレモンへの手紙四―五節の言葉である。

II 解説

1. なぜ編集者としてのアルベルト・レンプが重要なのか

従来 of 思想史研究は、著者としての思想家、あるいはその著者によって書かれ、表現されたテキストを、読者、ある

いは研究者がどのように受け取るか、という「著者―読者」関係という枠組みの中で展開されてきた。しかし近代以後、大学やアカデミーという制度を超えて、「大学の外での学」ということが可能になり、専門家集団としての大学人や学会員だけにではなく、広く大衆に思想の市場が拡大し、思想が一部の知的サークルの独占物ではなくなった時に、従来の「著作―読者」という枠組みは壊れ、両者の間に新たに知のプロモーターとしての編集者が登場した。⁽⁴⁾ 彼らはそこで経営的な問題のみならず、思想的な問題にもかかわるようになった。「時代精神がある明確な像として姿をあらわすとき、その表現を担った出版の社会に変化がみられる。知識人の運動を掘り下げていくと必ず出版人の動きにぶつかる。出版は新しい知の誕生に裏方の役割を担い、陰影の部分に位置しているが、また知の創造を組織していく側面を持つている。したがって思想が動き出す構造を見るためには、出版の生態的観察が必要となる。それはもともと出版というものが創造的な仕事であつたからである」⁽⁵⁾。しかしこの変化の意味は今日まで思想史研究においてはそれほど意識されてこなかったのではないだろうか。もちろん文学の研究においては出版社や編集者の問題は重要視されてきたし、思想史研究の場合でも出版社の政治的立場などの重要性は何度も指摘されてきたことである。しかし「編集者の思想」、あるいは編集者の仕事が著者としての思想家に、またその思想の紹介にどれだけの影響を与えてきたのか、ということについては十分な研究がなされてきたとは言い得ないであろう。

高度に情報化した近代においては思想も宗教も出版社あるいは編集者を必要とし、また出版社や編集者は思想や宗教の生みの親となる可能性がある。このシステムの外では、どれほど優れた思想も「荒野の声」で終わってしまう可能性がある。逆にどのような思想であつても、知のプロモーターが「大衆」という匿名の編集者の意向をマーケティングして売り出し、成功すれば、それは思想という市場を支配することになる可能性もある。それ故に近代以降における思想研究においては、あるひとりの天才的な思想家、カリスマを持った思想家の仕事の研究だけでは完結しなくなる。その思想をプロデュースし、世間に送り出した編集者との関係あるいは編集者の思想的立場にまで研究が及ばねばならない

のである。そこに思想史を新しく読み直すための可能性があるのではないか。

そのように考えるなら、これまでその存在は確認されていたが、内容については何も知られていず、未公開であったこの小さな追悼文も、ミュンヒエンの政治的・神学的出版社であるクリスティアン・カイザー社とその社主であり、編集者であったアルベルト・レンプと彼がその才能を見出し、後には同僚となったミュンヒエンの神学者ゲオルク・メルツとの思想的な関係を読み解くために少なからず意味のあるものだと行ってよいであろう。つまり、この追悼文の内容は、思想家と編集者との関係という視点から両者の関係を説明するための手がかりを提供しているのである。

2. ミュンヒエンの神学的アヴァンギャルドとしてのゲオルク・メルツ

神学的アヴァンギャルドとしてのメルツ

ヴァイルヘルム帝政期の終焉を決定付けた第一次世界大戦前夜に登場し、一九二〇年代ワイマール期には「危機の神学」と呼ばれるようになった主張を展開した一群の神学者たちがいる。彼らは「弁証法神学」、あるいは雑誌『時の間』の編集同人とも呼ばれ、さらにはこの時代の研究者によつて今日では「神学的アヴァンギャルド」、「神学的表現主義者」、「ヴァイマールの神聖フロント世代」などとも呼ばれている。聖なる熱狂と共に一九一四年に始まった戦争が彼らの共通の政治的経験であった。やがて一九一八・一九年の敗戦と革命によつてかつての美しい威厳を持った町並みは瓦礫の山と化し、彼らの恩師たちがそのグラントデザインを描いた帝政ドイツの精神は崩壊し、指導者なき未熟な共和政による政治の混乱、敗戦による経済の破綻、天文学的な数値で説明されるインフレの中で、飢え、途方に暮れた人々と

負傷した兵士たちが町をさ迷い歩くことになる時代を生きた人々である。さらにはこのような廃墟と化した国土をさまざまな天災が襲ったのである。どこを見ても希望を見出すことができないような時代であった。

一八九〇年代に生まれ、帝政期ドイツの神学部で教育を受けたこの若い神学者たちにとっては、この現実ドイツ文化の敗北であり、ヨーロッパ文化の崩壊の経験であった。それ以上に彼らにとっては、これまで彼らの文明を支えてきたキリスト教宗教や「神」の終焉を意味しているように思えたのである。そして崩壊という苛酷な現実の前では彼らがこれまで何の疑問もなくその権威にもとに学んでいた大学神学部で教えられていた神学という学問も、既存の宗教団体としての教会が提供する救済システムも無力であるように思えたのである。

そのような経験の中で神学的アヴァンギャルドたち、すなわちカール・バルト、フリードリヒ・ゴーガルテン、エドゥアルト・トウルナイゼン、ゲオルク・メルツが雑誌『時の間』を創刊し、ミュンヒエンのクリスティアン・カイザー社から刊行を開始したのが一九二二年のことであった。彼らはこのような崩壊の現実を前にして新しい神学が必要だと感じていた。彼らの共通の認識は全てが「既に」崩れ去ったのに、約束のものが「まだ」来ていない、この「時の間」で、「神学をいろはから学び直す」ということであった。今日バルトやトウルナイゼンの研究、また十分だとは言えないまでもゴーガルテンの思想についての研究が新たにいくつも書かれているが、ゲオルク・メルツの神学思想的意義、また彼の生涯や業績についての研究はほとんど皆無と言って良い状態のままである。しかしメルツは編集者と思想家との関係という視点から見ると、彼こそがヴァイマル期の神学史の転換を生み出した神学者であったと言えるべき存在なのである。

メルツは一九二二年三月三日にオバーフランケン州のヴァルカールブルンに生まれた。彼の父は初等教育の教師であり、母は教会音楽家として、オルガンと教会聖歌隊の指導者であった。一九一〇年から最初はバイロイトの神学校で、一九一三年からはライプツィヒ大学で哲学、歴史学、教育学、そして神学を修めている。一九一六年二月二七日にミュ

ンヒエン市で聖職者としての准允を受け、一九三〇年までバイエルン州のルター派教会に牧師として在籍している。

彼はバイロイト時代にこの時代のいわゆる自由主義的キリスト教、とりわけクリスティアン・ガイヤーやフリードリヒ・リッテルマイヤーから強い神学的、政治的な影響を受けた。また彼はヨハネス・ミュラー、ルドルフ・シュタイナー、クリストフ・ブルームハルトの影響を受け、社会主義、シュタイナーの人間学や神智学を学び、さらに当時の既存の教会制度を批判し、宗教は制度ではなく「神の自己啓示からはじまる」と主張し、後にヴァイマルの神聖フロント世代と呼ばれるようになったキリスト教とユダヤ教の神学者、哲学者、ジャーナリスト、革命家と交流するようになった。メルツはこの神の自己啓示という概念をユダヤ人神学者たちから学んだと証言している。

彼は一九一六年に宗教教育担当のミュンヒエン市付けの牧師となり、一九一八年からはミュンヒエン・ライムの教会で正牧師となり、一九一九年にはミュンヒエンの女子高等学校の宗教科の教師となった。その頃彼はクリスティアン・カイザー社の経営に参与するようになり、「キリスト者共同体」といういわゆる「教会外のキリスト教」の立場を助ける出版をはじめていたアルベルト・レンプと出会った。そして意気投合した両者は新しい神学的動向の研究をはじめるのであるが、依然として彼は「教会外のキリスト教」との交流を続け、シュタイナーを通してイエナの出版社主オイゲン・デューデリヒスとも知り合いになっていた。その関係でスイス出身のひとりの社会主義に傾倒した若い牧師のことを知り、その思想をドイツに紹介することになった。それがカール・バルトであり、彼らはクリスティアン・カイザー社から『時の間』という前衛的な神学雑誌を出版することになった。

それ以後メルツはバルトと行動を共にし、クリスティアン・カイザー社の編集顧問に就任している。一九三〇年にはペーテルの神学校に招聘され、一九三九年までそこに留まった。第三帝国の時代にはカール・バルトの主張に賛同し、告白教会に属し、一九四二年以後はヴェルツブルクに移っていたので、今回公開された追悼文は、ヴェルツブルクから郵送されたものである。

戦後は一九四七年に新設されたアウグスターナ神学校の教授として、実践神学、宗教改革史、一九、二〇世紀神学史などを講義し、一九五九年一月一日に逝去した。

彼らの神学は「弁証法神学」と呼ばれたり、「神の言葉の神学」と自ら名乗ったり、アメリカでは「危機の神学」と呼ばれた。しかしこの神学の本質はヴァイマル期の成立前後に登場したヴィルヘルム世代に反抗する若い制度破壊主義者としての姿である。

崩壊期の思想としての危機の神学、あるいは「学問における革命」

「危機の神学」は崩壊期の思想であった。彼らが考えたことは、第一には既存の学問、具体的には彼らを教育した大
学神学部との決別であった。『時の間』の編集同人たちはみな学位も、教授資格も持っていなかった。実は彼らは学生
としては非常に優秀で、その実力を早くから認められた秀才たちであった。しかし彼らが経験した一九一八・一九年の
崩壊は、大学という制度の中で営まれる神学への信頼を喪失させ、その神学が敗戦と社会システムの崩壊の中で何の意
味も持っていないこと、何らの力ある言葉をもはや語り得ないことを痛感させることになった。ゴッガルテンがある
日曜日の礼拝で敗戦の苦しみの中で希望を失わないようにと説教をしている時に泥酔した男がやってきて、「もう少し
ましなことを語れ。おまえの小難しい説教ではお腹は満たされない。いやはつきり言つてやる。魂も満たされない」と
言つて、椅子を蹴つ飛ばして出ていってしまったという。ゴッガルテンがそれまで人々に得意げに語っていた前世代か
ら学んだ「学としての神学」が崩壊の現実の前で何の役にも立たないことを身をもつて感じていた。今こそ語らねばな
らないはずの救済がこの現実の前で何のリアリティーも持っていなかった。彼らは大学の外で、「生」の現実と取り組
むために神学する道を選んだのである。これがヴィルヘルム帝政期ドイツの大学の花形であった「神学部」の教授たち

と、神学的アヴァンギャルドたちとの対立のはじまりであった。この対立は後にかつて皇帝ヴィルヘルム一世の正枢密顧問官であり、帝国議会図書館長、カイザー・ヴィルヘルム協会（後のマックス・プランク研究所）総裁であったベルリンの神学者アドルフ・フォン・ハルナックと神学的アヴァンギャルドの中心的な人物で、当時ゲッティンゲン大学の定員外嘱託教授に任命されていたカール・バルトとの「誌上公開往復書簡」によつて頂点に達した。

もちろんこのような現象は神学の分野だけで起こったことではない。たとえばマックス・ヴェーバーの『職業としての学問』をめぐる論争はこの時代の様子をよく伝えている。この講演の背景にあるのは、イエナの出版社主オイゲン・デューデリヒスが主催して一九一七年に行われたライプシヒゲンシュタイン城での討論会であった。それは一九一九年の敗戦までの学問を支えてきた世代とそれはもはや無用の長物だと考える新しい世代の対立であった。

ヴェーバーがその論争をふまえて『職業としての学問』を出版した後、この書物の中で批判された「新しい世代」、具体的にはゲオルゲ・クライスのエーリヒ・フォン・カラーは『学問の職分』でヴェーバーの批判を再批判している。しかしヴェーバーはその後急死したので、この論争はヴェーバーの友人でもあり、ハルナックの同僚でもあったベルリンの神学者エルンスト・トレルチによつて引き取られることになった。彼はこの世代間の対立、学問をめぐる新しい議論を「学問における革命」と呼んだ。

この革命はトレルチによれば既に大戦前一九一三年頃から学問や芸術のさまざまな分野ではじまっていたのである。イゴール・ストラヴィンスキーがパリのシャンゼリゼ劇場でピエール・モンツイーの指揮、ワスラフ・ニジンスキーの振り付けで「春の祭典」を初演し、あまりに斬新な企画の故に有名な騒動を起こした年、エドムント・フツサールの『純粹現象学および現象学の哲学の諸構想』が出版された年、ジークムント・フロイトの『トーテムとタブー』が出版された年、そしてミュンヘンで強烈な色彩を用いて神学から画家へと身を転じた「青騎士」のフランツ・マルクが「眠っている動物」を描いた年が一九一三年であるが、彼らが哲学や芸術、心理学の領域で伝統的なスタイルを破壊す

るような新しい知や美のデザインをもつてデヴューした年に、ゴールテンは『宗教の将来』を書き、バルトは「人格神への信仰」という有名な講演を行って、神学における新しい知のかたちを模索していた。一九一九年にヴェーバーが『職業としての学問』を再び講演し、「学問における革命」と呼ばれた論争が生じた年に、神学的アヴァンギャルドであるゴールテンは『宗教はどこへ行くのか』という痛烈な教会批判を書き、バルトは『ローマ書注解』の初版を自費出版し、伝統的な神学への本格的な挑戦を開始したのである。この「新しい世代」は、分野は違っても伝統や権威への不信頼と、それらによって長い間覆い隠されてしまっていたために、見ることができなくなっていた現実との取り組みを、新しい方法やスタイルでもう一度、一からはじめなければならぬと感じていたのである。

3. カール・バルトの『ローマ書注解』とゲオルク・メルツ

自費出版の仕事が見出されるまで

カール・バルトの『ローマ書注解』初版が出版されたのが一九一九年である。バルト自身の証言によれば、それは既に一九一八年六月には書き終わっていて、彼が校正をはじめた頃にはまだ第一次世界大戦は終わっていないかった。まさにこの書物はヴァイルヘルム帝政期の終焉の出来事としての第一次世界大戦の只中に書かれたのである。

しかしバルト自身この書物の出版についてどこかの出版社と契約があつたわけではなく、もちろん出版社からの依頼があつて書き始めたのでもなかった。それどころか、この初版が一九六三年に再版された際に彼が述べている通り、この「持ち込み原稿は、当時の名のある出版社からはいずれからも出版を断られてしまった」⁽⁶⁾のである。「三つの有名な

スイスの出版社は（それは当時まったく理解できることであつたが）、この問題にかかわることを拒否した。……結局私の友人であつた（ルドルフ・）ペスターロツツィーが多額の出版援助を申し出てくれたことによって、この書物を出版するという冒険を試みようと決意してくれたのは、ベルンのG・A・ベシュリン出版社だけであつた。それ故にもちろん一〇〇〇部を超えて印刷するということは問題にすらならなかつた」。

ペスターロツツィー夫妻はバルトの仕事を生涯支えた協力者であるが、バルトはこの経済的支援者をエドゥアルト・トウルナイゼンから紹介された。ペスターロツツィーは金物商品を扱う会社を経営する実業家であつたが、イギリスのキリスト教社会運動に関心を持ち、またそれに実際に参加してもいた。チューリッヒに住むようになってからその町のYMCAの活動を通してトウルナイゼンと知り合いになつたのである。⁽⁸⁾

バルトはその後ペスターロツツィーからさまざまな支援を受けるようになった。たとえばバルトは休暇の旅に彼の山荘を自由に使うことを許されていた。それがあのベルグリの山荘であつた。それはまるでバルト自身のものであるかのように、彼の思索の場となり、休息の場となつた。さらにバルトは『ローマ書註解』の初版以後も、一九四六年になつて戦後の新しい出版活動がはじまるまで、何度も出版のための経済的支援を彼から受けていた。またその他の支援についてはここでは書かないがトウルナイゼンとの往復書簡に詳しい。バルトはこの友人の過分な支援によつて何度も窮地から脱出することができたが、それは出版に限つたことではなかつた。私生活においても同様であつた。

もちろんバルトがこのような出版のための援助を受けたことは特別なことであつたとは言えない。思想家や宗教家が特定のパトロンの持つことはこの時代ではなお可能であつた。たとえばヴァイマル時代に「インフレ聖者」と呼ばれるようになった過激な宗教思想家たちは、⁽⁹⁾独自の講演会やコロニーを主催して生活費を得ていたが、他方で彼らの過激な宗教思想や予言に入れ込んだ富裕層からの支援で生き延びていたのである。バルト自身も、ある時ペスターロツツィーとの関係をまるで「インフレ聖者」と富裕層の関係のようだと揶揄され、噂されたことがある。

バルトはもちろんそのことを気にしていたし、友人たちも心配していた。バルトはトゥルナイゼンに宛てた手紙の中でペスターロツツィーの援助には心から感謝しており、またあまり彼に依存すべきではないとトゥルナイゼンから忠告を受けたことに対しても「ペスターロツツィーのような人の手にかかる」と、お金もただのお金というだけではなく、まったく違ったものになったかのようです⁽¹⁰⁾と弁解している。いずれにしてもバルトは用紙確保と印刷のための費用として、デイトトリッヒ・コルシュの計算によれば現在の金額に換算して約六千ユーロ程の支援を小切手で受け取ったのである。

さてG・A・ベシュリン出版社はいわば自費出版を申し込まれた原稿を、販売の責任を必要としない書物として、「出版費用と編集手数料を含めた金額を原稿とともに一括で支払うこと」を条件に、出版を引き受けた⁽¹¹⁾。既に述べた通り、これは特にめずらしいことではなく、この時代の偉大な哲学者も神学者たちもしばしば行っていた出版方法である。こうして初版は、奥付とは違って、実際には一九一八年一二月に出版された。

しかしこの書物はスイス国内で多く見積もって三〇〇部が販売され（そのうち七〇部をバルト自身が買い取っているのであるが）、ひとつ、ふたつの書評も書かれた。そのひとつが当時E・フツサールがその仕事に注目したことによって、広くドイツの精神科学の世界にもその名を知られるようになった若き日のエーミル・ブルンナーのものであった。

このままであれば『ローマ書註解』の残りの七〇〇部は出版社の倉庫に眠り続け、カール・バルトという労働運動に肩入れた、社会主義に幻想を抱いた牧師のモノログとして終わっていたに違いなかった。

ところが一九一九年九月二二日から二五日にかけて、チューリンゲン地方のタンバッハにあるヴィルヘルム・シュルトハイス所有の保養所「タンネンベルク」で行われた宗教社会主義者たちの大会でバルトが行った「社会におけるキリスト者」によって、彼は一躍ドイツでもその名が知られるようになった⁽¹²⁾。この講演自体はバルトの宗教社会主義との決別の講演と言われているが、実際にはバルトはこの後も活動的な社会主義者のひとりであり、また伝統的な社会や教会

制度のラディカルな批判者であり続けた。

この講演の後、バルトはヴァイマルの「聖なるフロント世代」と呼ばれるようになった既存の社会制度の破壊者たちと親密な関係を持つようになった。バルトの側だけではなく、ドイツ思想界のいわゆるアヴァンギャルドたちが、バルトに興味を持ち出したのである。『ローマ書注解』に響き渡る破壊的な言葉に彼らが共鳴したのである。

しかしそれだけでバルトの名がこの時代のドイツに知れ渡るはずはなかった。ここでもこの時代のもっとも優れた知のプロモーターたちが関与していたのである。このバルトのラディカルな思想に敏感にいち早く反応した編集者のひとりが実はイエナの出版社主で編集者であったオイゲン・ディーデリヒスだったのである。彼はバルトの講演のうわさを聞きつけ、すぐにディーデリヒス社主催の小さな会合にバルトを招き、バルトに新しい世界を紹介した。実はこの小さな会合こそが、バルトをドイツの思想界へと導くことになった記念すべき会合であった。

一九二〇年二月の出会い

一九二〇年二月にバルトはその妻と共にドイツ旅行に出かけている。二月八日にバーゼルを出発して、九日から一日までをハイデルベルクで、一二日はシュトゥットガルトで、一二日と一三日はバード・ボルで、そして一三日から一七日はミュンヘンに滞在している。その後彼はチューリッヒを経由して、ザーフィンヴェルに戻っている。この旅行を計画し、招待し、バルトの友人トゥナイゼン夫妻までも同行することを可能にしたのは、ミュンヘンの牧師ゲオルク・メルツであった。そしてこの一九二〇年二月の全ての計画の支払いは、その半分はメルツの名前でイエナに本社のある出版社のミュンヘン取次ぎに請求されている。それがオイゲン・ディーデリヒス社である。そして残りの半分は、メルツとディーデリヒスとの書簡によれば、ミュンヘン在住の書店主アルベルト・レンプのもとに届けられ、彼

が「喜んで精算してくれた」のである。⁽¹³⁾

ミュンヘンに到着する前に、バルトは既にドイツの新しい世代とのいくつもの出会いを経験していた。ここでとりわけ注目しておきたいのは、シュトゥットガルトではじめて会うことになったオイゲン・ローゼンシュトゥック・ヒュッシーのことである。彼の妻マルガレータは実はユダヤ人哲学者フランツ・ローゼンツヴァイクの恋人で、後にティリッヒとローゼンツヴァイクとを結び付けた人物でもある。ローゼンツヴァイクは従兄弟のハンス・エーレンベルクからティリッヒの論文集を譲り受けた時に即座に、その能力を認め、彼の恋人であるマリガリータに、「ベルリンの私講師にティリッヒという人がいます。この人はまさに将来の人物、わが世代の兄弟です。……彼の思想は述語の上に浮いている感じがしますが、他方で、真の言語という大地にしっかりと足を置いている感じがします」。「彼にこそ私の『救済の』星」について何かコメントをもらいたい唯一の哲学者です」と書き送っている。

バルトはメルツの勧めで、シュトゥットガルトでローゼンシュトゥックとかなりの時間話し合い、「急速な思想的一致に至った」⁽¹⁵⁾。ちなみにローゼンシュトゥックはバルトがスイスに戻った後、夏の休暇中にわざわざザーフィングヴィルの牧師館を訪ねほど親しくなった。彼は『ヨーロッパとキリスト教』という書物をその年に出版しており、バルトはこの書物を比較的丁寧に読み、ローゼンシュトゥックがアメリカに亡命した後も、彼とこの書物のことを忘れなかった。

ローゼンシュトゥックはバルトの『ローマ書註解』の中に、「新しい宗教の可能性」、「宇宙の境界線を移動するような大きな衝撃と新しい破壊的事実」を感じとった。そして彼はバルトをエーレンベルクと共に参加しているパトモス・クライスに誘ったのである。バルトはこの「預言者的」で、「表現主義的」な社会批判集団に、彼自身がH・シオルツの手紙で述べている通り最初は「積極的に参加し」、後に決定的に決別した。しかしこの旅行の前後バルトがパトモス・グループに強くひかれていたことは明らかである。⁽¹⁶⁾

ここで指摘しておきたいことは、デューデリヒスがメルツに資金援助をしてバルトをドイツ旅行に迎えたことによつ

て、この時はまだそのように見られてはいないし、そして誰もそのようには考えていなかった、新しい時代の萌芽とも呼ぶべき世代が不思議な結び付きをはじめているということである。この時代、ひとつの宗派や教派を越えて、敗戦とともにじまった新しい時代への期待ということのひとつになることが出来た人々がいたのである。テイリツヒとローゼンツヴァイク、そしてバルトとローゼンシュトック、エーレンベルクとゴーガルテンとが同じ問題意識でひとつになっていた。¹⁷ 彼らは「神の言葉」や「啓示」という共通の言葉を用いて、前世代の硬化化した時代精神に挑戦していたのである。バルトだけが神の言葉を聞くために啓示を神学を中心に置いていたのではないのである。

そして注目しなければならないことは、これらの宗派や伝統を超えた共同戦線がゲオルク・メルツだけではなく、ディーデリヒスにもよく見えていたということである。あるいは知のプロヂュースーサーとしての彼にはこれらの世代を結び付けるだけの力量があったというべきであろう。

さてメルツはバルトがミュンヘンに到着する二月一三日の夜、中央駅に出迎え、トウルナイゼンとの書簡によれば、彼は『ローマ書註解』の初版の一冊を「めじるしのためにと高々とさし上げて」¹⁸ 待っていてくれた。

メルツはまだ会ったことのないスイスの牧師の著作を読み驚き、彼の友人たち、とりわけディーデリヒスに紹介していた。メルツがこの書物をどれだけ理解していたのか、ということについては、バルトがトウルナイゼンに宛てた手紙の中で「メルツは素晴らしい人物です。『ローマ書註解』については、私自身よりよく知っているほです」¹⁹と述べていることから理解できる。そのメルツの興奮した手紙にディーデリヒスはすぐに関心を示し、彼がこの旅行を提案し、小さな会合での講演を計画したのであった。

アルベルト・レンプの役割

さてメルツがミュンヘンでバルトに紹介したのがヴィルヘルム帝政期の思想的アヴァンギャルドたち、あるいはヴァイマルの「神聖フロント世代」と呼ばれた人々であった。メルツはバルトのために、いわばサロンのような集まりを催し、そこであのタンバッツハ講演の小さな再現を試みようとしたのであった。その集まりに際してメルツは挨拶をして、タンバッツハに集まった人々とは、一九一八年の敗戦と革命によつて、大きな内的同様を経験した人々なのであり、彼らは政治的生と教会生活において「新しい道」を探索している人々であったと説明した。またこの小さな集まりに参加した人々は「既存の教会の路線の中に真の故郷を見出すことができず、一九一八年の破壊の後に、教会に与えられた課題への答えを既存の教会に期待できないと判断した人々の集まりであった」と⁽²⁰⁾とディーデリヒスに書き送った。ミュンヘンに集まったのは、「ほとんどはワンダーフォーゲルのような青年運動のメンバー、特殊な経歴を経たアウトサイダーたち」⁽²¹⁾の他に、宗教現象学に傾倒したマールブルクの神学者フリードリヒ・ハイラー、ゴッガルテンの紹介でやつて来た⁽²²⁾、後にドイツ的キリスト教を提唱することになる牧師職を返上したばかりのアルトウール・ボーヌス、一九一八年の革命に参加した法律家でカトリックのアレクサンダー・ミュンヒ、そして前年の革命で暗殺された独立社会民主党のクルト・アイスナーの娘ヒルデ・アイスナー等であった。

そしてメルツは、ディーデリヒスには内緒で、ひとつの企みを持つて、ミュンヘンの書店主で、小さな出版社を買い取ったばかりのアルベルト・レンプをこの会に呼んでいた。この出会いがバルトと『ローマ書註解』の運命を大きく変えたのである。

このレンプとメルツが、後にディーデリヒスとの交渉を経て、彼らが実際にその声を聞き、その文面を読んだカー

ル・バルトの『ローマ書註解』の在庫を、引き取り、これをドイツで流通させるというアイディアを持ち出したのである。この会合の参加者はそれに賛成し、さっそく契約が結ばれた。レンプはそれほど確信があったわけではなかったが、メルツの情熱的な演説の後にすぐに決断し、契約書を作成した。クリスティアン・カイザー社は、一九一九年三月に、ベルンのG・A・ベシュリン社の倉庫に眠っていた『ローマ書註解』の初版の在庫がまさに倉庫の肥やしとなりはじめた時、すなわち「スイスでの販路の購買力が（ともかくも）三〇〇部売れたことで頭打ちになったと思われた時」、ドイツに持ち込まれ、残りの七〇〇部を売り切ったのであった。

その販売ルートは明らかにあのレンプも参加した会合に集まった人々たち、すなわち一九一八・一九年の崩壊後、「政治的生と教会生活の新しい道」を求めていた人々であった。つまりこの時代アウトサイダーであった若い世代が熱狂的に歓迎したのであった。

そこまではディーデリヒスとメルツとレンプの計算通りであった。そして予想通りに、彼らは、この新しい世代を受け入れることができなかった人々、また同世代でも既に大学の神学部でそれぞれの成功を得ていた人々からは拒絶されることになった。つまり、バルトの『ローマ書註解』はこの時代のドイツの社会的・世代的対立図式の中にしっかりとはめ込まれることになったのである。それはヴァイルヘルム帝政期のナシヨナリストたちによつて構成されている古い世代と、その世代行き詰まりに耐えかね、その世代が作り出した一切のものへの破壊を宣言した新しい世代との対立であり、バルトはその戦いの戦略の中に組み込まれた。レンプはこの戦いのために、いわば弾薬や食料を運び込む役割を自覚的に担うようになったのである。この戦いは、ヴァイマル時代を経て、さらには第三帝国の時代へ、そして戦後の冷戦構造の時代にまで続くことになったのである。

4. クリステイアン・カイザー社とアルベルト・レンプ

それではアルベルト・レンプとその出版社とは何であつたのであろうか。

メルツはドイツの出版社では一般的である、それぞれの出版者の刊行書を決定するための査読を行う社外編集顧問のひとりであつた。しかしそれだけではなく、メルツとレンプは〈神学〉を共有していた。最後にこのレンプによつて育てられたミュンヘンのクリステイアン・カイザー社についてふれておきたい。既に述べた通りクリステイアン・カイザー社といえば、倉庫で眠ろうとしていた、売れ残りのカール・バルトの『ローマ書註解』の初版をスイスのG・A・ベシュリン社から買取り、ドイツで流行させ、改訂第二版の出版によつて大成功をおさめ、さらには弁証法神学の雑誌『時の間』、『今日の神学的実存』シリーズなどを刊行し、戦争中は告白教会と戦いを共にし、戦後もディートリッヒ・ボンヘッフアーやユルゲン・モルトマンの著作を刊行した代表的なプロテスタント神学出版社のひとつとしてよく知られていた。「知られていた」と書いたが、実は一九九三年に、経営が困難になりギュータースローの出版グループに売却されたので、現在はこの出版社は存在していない。⁽²⁴⁾

創業から『ローマ書註解』の成功まで

クリステイアン・カイザー社は一八四五年に、ゲーテの全集の刊行で有名なコッタ社に勤めていたヴィルヘルム・ハインリヒ・クリステイアン・カイザーによつて書店として設立された。同時に彼は出版事業も手がけ、一般書籍と同時

にプロテスタント神学に関する著作も引き受けていた。次第に神学関係の出版が経営の中心になり、カトリック優勢であるバイエルンの中で「小さなプロテスタント教会のお抱え出版社」⁽²⁵⁾と呼ばれるようになっていた。

一八六六年にカイザーが死去した後、家族によつて経営は続けられたが、一九一一年、事業の売却を希望していたカイザー家から経営を引き受けたのがアルベルト・レンプであった。レンプは経営を引き受けるとすぐに、新しい書店をミュンヘン市庁舎広場に開店させ、さらに出版事業も彼独自の方向をめざすことになった。彼はバイエルンの「自由プロテスタント運動」の推進者であつたクリスティアン・ガイヤーやフリードリヒ・リッテルマイヤーの「キリスト者共同体」を助け、彼らの著作や雑誌を出版するようになった。この運動は既存の国民教会制度を批判し、教会のみならず、国家や社会の変革を願うリベラリストたちによつて構成されていた。それはレンプの神学的、政治的立場でもあつた。彼はこの時代台頭しはじめた新しい世代の思想や政治的立場に敏感に反応し、親近感を覚え、彼らを支持するようになっていた。⁽²⁶⁾

レンプが買い取つたこの小さな出版社の名を一躍世界的に有名にしたのは、新会社創設から八年後の一九一九年にスイスからやつてきたひとりの牧師との出会いであつた。カール・バルトである。バルトの『ローマ書註解』の初版は教会内外の社会主義者たちによつて少し話題になつていたが、それ以後はほとんど売れることはなかつた。しかしこの書物は、既存の教会制度へのラディカルな批判、またヴィルヘルム帝政期の社会や宗教、文化や学問へのトータル否定、そして伝統的な大学制度の中で営まれる神学とは違つた新しい言葉で溢れていた。社会主義や共産主義者たちが共鳴するような革命的論理さえもそこから読み取られていたのである。

既に述べた通り、バルトは一九一九年九月二二日から二五日にかけて、チューリンゲン地方のタンバッハにあるヴィルヘルム・シュルトハイス所有の保養所「タンネンベルク」で行われた宗教社会主義者たちの大会で「社会におけるキリスト者」という講演を行い、その名はドイツにも伝えられ、ヴァイマル期の「神聖フロント世代」と呼ばれるよう

になった既存の社会制度の破壊者たちと親密な関係を持つようになった。彼の側だけではなく、ドイツ思想界のいわゆるアヴァンギャルドたちが、彼に興味を持ち出したのである。⁽²⁷⁾

レンプは彼が支持する牧師たち、特にクリスティアン・ガイヤーやフリードリヒ・リッテルマイヤーに紹介され、後にクリスティアン・カイザー社の編集顧問となったミュンヘンの牧師で、当時はギムナジウムの宗教科の教師であったゲオルク・メルツにもこの牧師と会うことを勧め、メルツは彼と同じように出版業を営み、『デイ・タート』の出版を引き受け、フリードリヒ・ゴーガルテンの書物の出版していたオイゲン・ディーデリヒスからその牧師の話を聞いていたのである。レンプとバルトとの出会いについては既にふれたので、ここでは繰り返さないが、これによつてバルトの『ローマ書註解』初版はドイツへと持ち込まれ、改訂第二版は爆発的な成功をおさめ、「危機の神学」、「神の言葉の神学」、「弁証法神学」と呼ばれるようになった神学グループが誕生したのである。⁽²⁸⁾

このグループの出版を引き受けることで、クリスティアン・カイザー社はプロテスタント神学の出版社として、神学的にも、政治的にも明確な立場を打ち出すようになったのである。カイザー社はリベラルな出版社として他の同時代の出版社の中で特別な立場にあっただけではなく、神学出版社としても他の伝統的な神学関係の出版社とその性格を違にしていた。しかしこの出版社が送り出す新しい「批判」の言葉は、この時代の読者に対して新鮮に語りかけ、新しい読者を獲得することになったのである。

クリスティアン・カイザー社から出版された『時の間』と名付けられた「弁証法神学」の雑誌はそれまでの大学神学部の影響のもとに編集されていた学的神学雑誌とはまったく性格を異にしていた。このタイトルはゴーガルテンがオイゲン・ディーデリヒスとの会話の中からヒントを得てつけた。編者の中心人物であったメルツもバルトも、トゥルナイゼンもゴーガルテンもそれまでの神学の担い手とは違っていた。彼らは学位も教授資格もなく、いわば意識的に「大学の外の神学」を営む神学者たちであったが、⁽³⁰⁾従来の制度批判者と違っている点は、彼らは、彼らの活動を支える出版社

によつて援助され、著作を公にすることができた、という点である。

ちなみに『時の間』に執筆したバルトとゴーガルテンの周辺にいた神学者たちは次の通りである。ハンス・アスムツセン、ハインリッヒ・バルト、ヨアヒム・ベックマン、エーミル・ブルンナー、エルンスト・ビザー、ヘルマン・デーム、エドワルト・エルヴァイン、カール・フィッシャー、オットー・フリッケ、テオドル・ヘッケル、ヘルマン・ヘリゲル、リヒェルト・カルヴェール、ヒンリヒ・クニッターマイヤー、ヘルマン・クッター、ヴィルヘルム・レーヴ、ヴィルヘルム・ニーゼル、エリック・ペーターソン、エーリヒ・プリュチヴァアラ、ゲルハルト・フォン・ラート、パウル・シエンプ、ハインリヒ・シオルツ、ハンス・シヨメルス、パウル・シュッツ、リヒェルト・ジーベック、カール・シュテューヴェザント、ヴォルフガング・トウリルハース、ヴィルヘルム・ヴィシャー、ヴィクトール・フォン・ヴァイツェッカー、エルンスト・ヴォルフである。

このリストからも明らかな通り、『時の間』は決して単にプロテスタントの神学雑誌であつたわけではない。カトリックのエーリヒ・プリュチヴァアラや後にカトリックに改宗するエリック・ペーターソン、またヴィクトール・フォン・ヴァイツェッカーなどの執筆者からも明らかな通り、彼らはこの時代の「神聖フロント世代」であり、宗派意識や神学的立場によつて結束していたというよりは、既存の教会や神学、そして伝統的な大学制度や学問システムへの批判と新しい学問や言葉の探求が彼らをひとつにしていたのである。⁽³¹⁾

破壊や批判からエスタブリッシュへ

その後のカール・バルトと「弁証法神学」のグループの成功はよく知られている。学位論文も教授資格論文も書かずに、カール・バルトはゲッティンゲン大学に、ゴーガルテンはブレスラウ大学に就職している。⁽³²⁾「学問における革命」

が確かに起こったのである。制度や伝統は批判され、批判は破壊へと向かった。バルトは確かに学としての神学に大きな変化をもたらしたのである。そしてそれだけではない、彼らは「主流」になったのである。それにともなつてバルトやゴッガルテン、そして弁証法神学者たちの著作を出版していたクリスティアン・カイザー社もまた「主流」になった。国民教会制度を批判する自由プロテスタンティズム協会や既存の「神学部」の外の神学」を支援する出版社から、今やその時代の神学を形成する出版社へと大きく様変わりして行くのである。

それはちょうどヴィルヘルム帝政期からヴァイマル期にかけて、表現主義運動によつて既存の芸術様式や制度を批判したカンディンスキーが、批判と破壊の後で、ヴァイマル期には国立であるバウハウスの教官になったことに似ている。ヴァイマルのフロント世代のラディカルな批判は成功したのである。そして彼らは「批判者」から時代の「主流」になったのである。⁽³³⁾

ナチスの時代とクリスティアン・カイザー社

しかし時代は大きく変化しはじめていた。行過ぎた批判や改革、そして単なる破壊は、最初は人々の心をとらえたのだが、その一時的な高揚は次第に破壊の後に何が形成されたのか、何もなかったではないか、という不安へと変化しはじめた。新しい、自由で、デモクラティックな時代は、抑圧された戦後の精神状況や経済的重圧を一時的に忘れさせてくれるものであったが、時代にも、生活にも実際には何の変化もなかった。大衆はそんなことはないはずなのだが、過去のヴィルヘルム帝政期を理想化し、「かつてはよかつた」と考えるようになったのである。その時登場したのがナチスであつた。この時代の教会はこの動きにほとんど無抵抗であつた。⁽³⁴⁾ もちろんカール・バルトのナチス批判はよく知られており、「告白教会」の運動もよく知られている。

実はクリスティアン・カイザー社はこの「告白教会」の重要な出版社として知られているが、これはバルトや告白教会に依頼されて、彼らの出版に協力したということではなかった。むしろアルベルト・レンプ自身がこの運動の担い手のひとりであり、彼はドイツに留まり続けたという意味では、バルトなどよりはるかに自覚的にナチスと戦い、また積極的にユダヤ人を支援した。彼は妻と共に「レンプ・グループ」を設立し、ナチスとの神学的な対決を決意し、告白教会と行動を共にしたのである。

もちろんレンプの行動には限界もあった。戦争中は、法律により出版社は再編成を余儀なくされ、戦時体制への協力を強制させられたのである。そのような中でレンプは一九四三年に亡くなっている。ゲオルク・メルツが弔辞を書いているが、まさにレンプはこの時代の中で、「誠実であろうとした真の編集者であるだけではなく、彼自身が言葉の正確な意味において神学者であつた」⁽³⁵⁾のである。

戦後の発展と終焉

戦後のクリスティアン・カイザー社は、戦争中の困難とはうってかわって、カール・バルトの弟子たちやデイートリッヒ・ボンヘッフアーの著作の出版、また世界的には冷戦構造、ドイツにおいては東西分裂という政治的な状況での神学的発言の支援によって、再び「主流」になった。

さらに追い風となったのは一九六四年に出版されたユルゲン・モルトマンの『希望の神学』の大ヒットとそれに続く時代における政治的神学の流行であつた。クリスティアン・カイザー社はこのような世界の政治的対立構造の中で、明らかにひとつの立場を掲げ、それを貫いたと言つてよいであろう。どちらかと言えば左派支持の知識人や聖職者たちはこの出版社にひとつの政治的立場と神学とを見出していた。

一九七〇年にクリスティアン・カイザー社は創業一二五周年を記念して、祝賀論文集を編集し、関係者に配布したが、その中にはバルトやモルトマンのみならず、戦争中に旧約学教授として告白教会運動に協力したゲルハルト・フォン・ラートや新約学ではエルンスト・ケーゼマンの文章が掲載されている。この時代の雰囲気を感じさせ、またカイザー社の勢いも感じさせる編集になっている。⁽³⁶⁾

また一九七〇年代には、ミュンヒェン大学にプロテスタント神学部が増設されると、その学部の初代倫理学教授として招かれたトゥルツ・レントルフは後にはまったく別の路線を行くことになったが、やはり政治的神学の提唱者であり、初期の蜜月時代、クリスティアン・カイザー社はミュンヒェン大学のプロテスタント神学の出版物を引き受ける出版社となった。もちろん、そのような中でもクリスティアン・カイザー社の政治的・神学的立場を嫌う教授がおり、チュービンゲン大学とJ・C・B・モール社やゲッティンゲン大学とファンデンヘッケ・ウント・ルプレヒト社との関係とは異なっていた。現在に至るまで一貫してミュンヒェン大学やバイエルン・アカデミーの出版物を引き受けている主たる出版社はむしろC・H・ベックである。⁽³⁷⁾

ところがクリスティアン・カイザー社の経営は、決して順調ではなかった。カイザー社の編集や出版物への評価は、一九八〇年代後半以後急速に低くなっていた。もちろんそれまでもカイザー社の経営は過去の宗教改革関係の著作、弁証法神学やボンヘッファアの著作に依存しており、順調であつたわけではない。新しい神学的挑戦を支援し、出版を援助するカイザー社の方針は一貫しており、確かに新しい神学的潮流を積極的に引き受けてきた。しかしこのようなカイザー社の姿勢に読者は必ずしもついて行けなかったのである。

決定的な出来事がはじまっていた。ソ連でのペレストロイカからはじまった東欧を含む東側の政治的变化は、クリスティアン・カイザー社を支持し、また同社が支援してきた神学者たちの政治的・神学的立場とは異なつた方向へと動き出したのである。社会の動きは急速であつた。東欧諸国の民主化からベルリンの壁の崩壊、そしていわゆるドイツ統一

までの急激な社会変動の波をクリスティアン・カイザー社は経験し、経営という面だけではなく、出版の理想という点でも同社は時代に追い越され、時代の波にのみ込まれてしまったのである。

ヨーロッパにおける東西冷戦構造の最後の後始末として、ドイツが統一されたのを見届けたクリスティアン・カイザー社は一九九三年、ヴィルヘルム・ハインリヒ・クリスティアン・カイザーが最初の書店を創業してからは一四八年、レンプが買い取ってからは八二年でその歴史を閉じることになった。

クリスティアン・カイザー社の買収が残した思想的な問い

アルベルト・レンプのような明確な政治的、神学的立場を持った社主と編集者によって会社が設立され、またその思想的後継者たちによって経営が続けられたクリスティアン・カイザー社はまさに時代との戦いの中で出版を続けてきたのである。時代がヴァイマルのリベラリズムから、ナチスの全体主義へ、そして冷戦時代から東西対立構造の崩壊とアメリカへの一極集中へと展開して行く中で、カイザー社は時にはその時代の主流となり、時には時代と戦い、そして最後には世界の大きな政治的・経済的な運動がこの小さなプロテスタント出版社の運命をのみ込んでしまった。

この出来事は思想と出版、出版と社会との関係についての重大な問題を提起しているのではないだろうか。問題は出版社自身が社会の動向にどのように対峙したのか、ということである。社会の主流に反して書物を出し、思想を問うという場合には、その時代の社会の動向を十分に知りつつも、それにあえて反する書物を出すということであるから、そこに出版社の神学や政治的態度が自覚的に現われ出ることになる。その場合にはまさにその思想は社会の木鐸となり、問いとなり、新しい時代の言葉となる。苦しい経営状況の中で破綻がやってきたとしても、時代に対してひとつの使命を果たしたという解釈が可能になる。

しかしその破綻の原因が、出版社がその動きを十分に理解せずに、時代とずれてしまった自らの立場を、ドグマのように奉じ、その路線を無自覚に踏襲しただけだったとすれば、それは出版社の怠慢、そして逆説的なことであるが出版社の神学の保守化が起ったことである。思想はラディカル、リベラルでも、出版社、編集者の態度が保守的、権威的、伝統主義的なのである。クリスティアン・カイザー社に起ったことは限りなく後者に近いのではないだろうか。

一九九〇年代から二〇〇〇年代の社会の動きは、クリスティアン・カイザー社とその周辺の神学者たちの主張には逆流であつたし、また多くの読者がカイザー社の主張に距離を感じるようになったことは確かである。出版社の政治的な立場が、時代の変化にのみ込まれた典型的な例がクリスティアン・カイザー社であつた。

問題は、出版社の神学や政治的立場、あるいは編集者はこの時代の動向をどのように見るべきなのか、ということである。これがふたつ目の問題である。今回翻訳した弔辞からも明らかな通り、クリスティアン・カイザー社はこの課題、この難問と既に歴史の中で出会い、経験済みであつた。残念なことにこの経験は現代に生かされなかったのではない。出版社は誰を相手にしているのか、ということである。アメリカ発の政治や経済の動きに敏感になり、それを上手く分析し、流行におくれなようにすることが編集者の課題なのだろうか。編集者は断片的で、すぐに役立ち、点数化して理解するような教養を切り売りすることでマーケットの動向に対応することが必要なのだろうか。そうではないだろう。出版社が印刷所と同じではないのはそこに編集者がいるからだ。だからこそ、編集者は著者の書きたいことだけではなく、「思想としての編集者」としての自らの立場に気が付かねばならなかったのではないだろうか。エポックメイキングな神学者カール・バルトをデビューさせた編集者と出版社、そして両者を結び付けた編集顧問の関係は、この問題を考えるために貴重なものである。ここに翻訳した追悼文はこの三人の関係、それだけではなく三人が共有した神学の最後の証言でもある。さらにメルツの追悼文は、編集者の思想のみならず、編集者の社会的責任についても考え

させられる。レンプの仕事がめざし、メルツが共鳴したことは、出版の社会的責任ということだったからである。

* 本論は平成二三年度科研費基盤研究(C)「近代ドイツにおける宗教と出版社の関係についての研究」の研究成果の一部である。

注

- (1) テクストには An die Mitarbeiter des Evangelischen Verlags Albert Lempy という宛名がある。
- (2) この教会の歴史とレンプの生涯については Armin Rudi Kitzmann, Mit Kreuz und Hakenkreuz. Die Geschichte der Protestanten in München 1918–1945, München 1999 を参照のこと。
- (3) Ludwig und Margrit Hönig (Hg.): Otto Bruder. Aus seinem Leben und Wirken. Stuttgart 1975, 42
- (4) 思想史研究における「編集者の視点」については拙著『思想としての編集者——現代ドイツ・プロテスタンティズムと出版史』(新教出版社)を参照のこと。
- (5) 上山安敏『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末と二〇世紀』(岩波現代文庫) 一五九頁
- (6) Karl Barth, Vorwort zum Nachdruck von dem Römerbrief, 1. Aufl., 1963, in: Der Römerbrief (Erste Fassung) 1919, hg. Von Hermann Schmidt, Karl Barth Gesamtausgabe, II, Bd. 16,
- (7) *ibid.*
- (8) ペスターロッチ夫妻とバルトとの関係については G. Merz, Wege und Wandlungen, 1961 München, 25ff. を参照のこと。

- (9) Ulrich Linse, Barfüßige Propheten. Erlöser der zwanziger Jahre, Berlin 1983 を参照のこと。
- (10) 一九一九年一〇月一九日のトゥルナイゼン宛の書簡を参照のこと。 Karl Barth—Thurneysen Briefwechsel 1: 1913–1921 hg. von E. Thurneysen, 1973
- (11) Vgl. Hermann Schmidt, Vorwort des Herausgebers, in: Karl Barth, Vorwort zum Nachdruck von dem Römerbrief, 1. Aufl., 1963, in: Der Römerbrief (Erste Fassung) 1919, hg. von Hermann Schmidt, Karl Barth Gesamtausgabe, II, Bd.16, IXff.
- (12) Karl Barth, Der Christ in der Gesellschaft: Eine Tambacher Rede. Mit einem Geleitwort von Hans Ehrenberg, Würzburg: Patmos Verlag, 1920
- (13) G. Merz, *ibid.* 204f.
- (14) Franz Rosenzweig, Der Mensch und sein Werk: Gesammelte Schriften I: Briefe und Tagebücher. 2. Band. 1918–1929, hg. von Bernhard Casper, Hauge 1979
- (15) このこともあり、バルトの『社会の中のキリスト者』は最初ヴュルツブルグのパトモス出版社から出版されることになったのである。
- (16) 「内容ははつきりしないが、積極的な関係」であったという。 H・シュルツ宛の一九五四年八月二日付けの手紙。 Karl Barth Gesamtausgabe. Offene Briefe 1945–1968, hg. von Dieter Koch, Zürich 1984,
- (17) どのような時代分析にこころは、Friedrich Wilhelm Graf, Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik, in: Jahrbuch des Historischen Kollegs 2004, München 2005, 49–81; ders., Der heilige Zeitgeist. Studien zur Ideengeschichte der protestantischen Theologie in der Weimarer Republik, Tübingen 2011 を参照のこと。
- (18) トウルナイゼンへの一九一九年二月二〇日付けの手紙 Karl Barth—Thurneysen Briefwechsel: 1: 1913–1921 hg. von E. Thurneysen, 1973
- (19) *ibid.*
- (20) Marz, *ibid.*
- (21) *ibid.*
- (22) バルトは一九五七年七月一六日付けの G・デーレンへの手紙の中で「私はここでシュテルツェンドルフの牧師フリードリヒ・

「ゴータルテンに会った」と書いてある。

- (23) Karl Barth, Vorwort zum Nachdruck vom Römerbrief, 1. Aufl. in: *ibid.*
- (24) この出版社の歴史については Friedrich Wilhelm Graf/Andreas Waschbüsch, Christian Kaiser Verlag, in: *Historisches Lexikon Bayerns*, 2009 を参照のこと。
- (25) Nachlaß: Christian Kaiser Verlag, Bertelsmann Archiv Gütersloh: CKV 4
- (26) Helmut Gollwitzer, Zum Weg der Zeitschrift, in: *Evangelische Theologie* 44 [= 39 NF] (1984), 137–147
- (27) このあたりの事情については本書第 1 章を参照のこと。
- (28) Georg Merz, Die Begegnung Karl Barths mit der deutschen Theologie, in: *Kerygma und Dogma* 2 (1956), 157–175.
- (29) Manacenc Mathias Lichtenfeld, Georg Merz—Pastoralthologe zwischen den Zeiten. Leben und Werk in Weimarer Republik und Kirchenkampf als theologischer Beitrag zur Praxis der Kirche, Gütersloh 1997
- (30) Friedrich Wilhelm Graf, Friedrich Gogartens Deutung der Moderne. Ein theologiegeschichtlicher Rückblick, in: *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 100 (1989), 169–230
- (31) Vgl. Peter Lang, Konkrete Theologie?—Karl Barth und Friedrich Gogarten “Zwischen den Zeiten” (1922–1933), Zürich 1972
- (32) *ibid.*
- (33) Friedrich Wilhelm Graf, *Annuntiatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik*, in: *Jahrbuch des Historischen Kollegs* 2004, München 2005, 49–81
- (34) Friedrich Wilhelm Graf/Andreas Waschbüsch, Zwischen den Zeiten, in: *Historisches Lexikon Bayerns*, 2009
- (35) この Nachlaß: Christian Kaiser Verlag, Bertelsmann Archiv Gütersloh: CKV 4 の中に現存のある手紙のテキストを参照。
- (36) Chr. Kaiser Almanach—125 Jahre Chr. Kaiser Verlag, München 1970
- (37) Graf und Waschbüsch, *ibid.*